

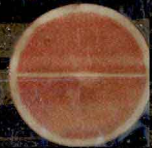
ライ  
レミゼラブル

4.3

世界文学全集

43

演出版



ユゴー  
レ・ミゼラブル  
I

井上究一郎訳

河出書房

© 1970



カラー版 世界文学全集 第43巻

ユゴー レ・ミゼラブル 1

昭和 45 年 1 月 25 日初版印刷

昭和 45 年 1 月 30 日初版発行

訳 者 井上究一郎

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

印刷者 澤村嘉一

印 刷 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町3の6

電話 東京 (292) 3711 (大代表)・振替口座 東京 10802

定 価 850 円

製 本・加藤製本株式会社

製 函・加藤製函印刷株式会社

本文用紙・三菱製紙株式会社

表 紙・日本クロス工業株式会社

0397—312143—0961

# 目 次

レ・ミゼラブル

1

|      |       |     |
|------|-------|-----|
| 第一部  | フアンチヌ | 7   |
| 第二部  | コゼット  | 217 |
| 第三部  | マリユス  | 405 |
| 詳細目次 |       | 515 |
| 年 表  |       | 520 |
| 解 説  |       | 531 |

巻頭口絵 1879年のユゴー像（パリ、ヴィクトール・ユゴー館蔵）

ボア（1832-1922年）筆

本文カラーさし絵

野田弘志

© 1970 H.Noda

装 幀 亀倉雄策

レ・ミゼラブル

1

井上  
究一  
郎  
訳

## 主要人物

ジャン・ヴァルジャン ファヴロールの枝切り職人。貧しさと飢えのために一切のパンをぬすんでとらえられ、トゥーロンの徒刑場に送られる。脱獄を重ね、十九年間の刑期をおえて放免。その年、一八一五年が物語の発端。彼は難生してモントルイユ・シュール・メールの市長マドレーヌ氏となるが、ふたたび闇の世界にはいる。のちフラン氏とも言われ、ユルチーム・フォーシュルヴァンとも変名する。物語は彼の生涯をめぐって展開、その死によって終わる。本書の主人公。

シャルル・フランソワ・ビヤンヌ ミリエル ディーニュの司教。高德のはまれ高く、徒刑囚ジャン・ヴァルジャンに大きな精神的影响をあたえる。

バチスチヌ ミリエル司教の妹。老嬢。

マクロワール ミリエル司教とその妹に仕える老女中。

プチ・ジェルヴェ 煙突掃除などをして各地を放浪するサヴォワの少年。

ルイ十八世 正統王朝派の国王。フランス大革命で死刑となったルイ十六世の次弟。一八一四年ナポレオン失脚後王位にのぼる。一八一五年ナポレオンの百日天下ののち重祚。一八二四年没。弟シャルル十世がそのあとをつぐ（一八三〇年まで）。王政復古期の国王。

ファンチヌ モントルイユ・シュール・メール出身の孤児。バリ

の通勤お針女。男にすてられ、郷里で女工、ついで売笑婦となり、マドレーヌ氏の診療所で病死する薄幸の女。コゼットの母。

フェリック・ス・トロミエス ファンチヌを誘惑してすてざる不良なバリの大学生。

コゼット ファンチヌとトロミエスとのあいだに生まれた私生児。孤児となり、田舎にあずけられ、「ひばり」と呼ばれ、虐待される。ジャン・ヴァルジャンに救われ、バリに出ていわばその娘となる。ラノワール嬢とも呼ばれ、のちに幸福な結婚をする。

テナルディエ夫妻 モンフェルメイユの安宿屋の主人。夫妻とも冷酷で貪欲。男はワテルロー軍曹と称しているが、うしろ暗い過去をもつ。コゼットをあずかり虐待する。一家はのちバリに出て下層民となり、男はジョンドレットと称する悪党となる。

ジャヴェール ジャン・ヴァルジャンを徹底的に追っかけてやまない廉潔で無慈悲な警視。

フォーシユルヴァン モントルイユ・シュール・メールで車の下敷きとなり、マドレーヌ氏（ジャン・ヴァルジャン）に救い出される。のちバリで女子修道院の庭番となり、ジャン・ヴァルジャンを献身的にかばう。

ジャンマチウ 誤ってジャン・ヴァルジャンと見なされ、処刑されようとする老人。

**サンブリス修道女** ラザリスト会修道女で、マドレーヌ氏の診療所

にはたらく慈善看護婦。病んだファンチヌを献身的に看護し、その死をみとる聖なる童貞。マドレーヌ氏（ジャン・ヴァルジャン）をジャヴェールの手から逃れさせるために、生涯はじめてであり最後であるうそを述べる。

**ナポレオン・ボナパルト** ワテルローの会戦についての作者の回想に登場する。

**イノサント女修道院長** 当時聖体礼拝のル・ブチ・ビクビュス女子修道院長。

**マリユス・ボンメルシー** ナポレオンによって男爵をさずけられた軍人を父とし、バリのブルジョワの娘を母として生まれた孤児。ナポレオンを崇拜し、大革命の思想に共鳴し、王党派の祖父のもと

とびだして、革命運動に身を投じる。作者の若い日の一分身。コゼットの恋人となり、バリケードからジャン・ヴァルジャンに救い出され、やがて祖父にゆるされて結婚する。

**ジョルジュ・ボンメルシー** マリユスの父、勇猛果敢な陸軍大佐。ナポレオン皇帝に献身し、ワテルローの戦場でテナルディエに救い出される。王政復古後、家族とひきはなされて孤独のうちに死ぬ。

**リニック・エスプリ・シルノルマン** マリユスの祖父。女好きの社交人を通してブルジョワの老人。頑固な王党派。その長女は独身、次女はボンメルシーの妻となり、マリユスを生んで死ぬ。マリ

ユスはこの老人とその長女の老嬢とにそだてられた。

**エポニーヌ** テナルディエ夫妻の姉妹。ひそかにマリユスを愛し、マリユスの命を救うために、バリケードでその犠牲となって死ぬ。

**ガヴロッシュ** テナルディエ夫妻の息子。家庭の愛うすく、バリの浮浪児の群れに投じる。一八三二年六月五日の暴動に加わり、反乱軍のバリケードで大活躍するが、弾にあたって死ぬ。

**ルイ・フィリップ王** オルレアン王朝派の国王。一八三〇年の七月革命によってフランス国民の王となる（一八四八年の二月革命まで）。七月王政期の国王。

**マブーフ** サン・シュルピス教会堂の教区財産管理委員で、植物研究家。マリユスに好意をよせている老人。のちにバリケードで死ぬ。

**テオデュール** ジルノルマン氏の子、長女のシルノルマン嬢にかわいがられる陸軍中尉。

**アンジョルラス、コンプフェール、ブルーヴェール、クールフェラック、フィイ、バオレル、レーグル（ボシエ）、ジョリー、グランデール** 政治秘密結社「ABCの友」の会のメンバー。情熱的な共和主義革命家たち。アンジョルラスはその仲間の首領株。マリユスを仲間に入れ、一八三二年六月五日の反乱を起こし、シャンブल्ली通りのバリケードに立てこもって国民軍に抵抗しながら全滅する。

社会に法律と風習とによる処罰が存在し、それがこの文明のただなかに人爲によつて地獄をつくりあげ、神聖な運命を人間の不幸でもつれさせるかぎり——、またこの世紀の三つの問題、すなわち、プロレタリアであるために男が落伍し、飢えのために女が墮落し、闇夜のために子供がいじけるといふ三つの問題が解決されないかぎり、——また、ある地域で社会の窒息状態が生じる可能性のあるかぎり、——言葉をかえれば、そしてもっとひろい見方をすれば、この地上に無知と悲惨とがあるかぎり、このような性質の本もまた役に立たないだろう。

オートヴィル・ハウス、一八六二年一月一日

# 第一部

## ファンチーヌ

## 第一編 正しい人

## 一 ミリエル氏

一八一五年に、シャルル・フランソワ・ピヤンヴニユ・ミリエル氏はディニユの司教だった。七十五歳にもなろうという老人で、一八〇六年以来ディニユの司教職についていた。

そのいきさつは、これからの物語の内容そのものになんの関係もないのだが、彼がこの司教区に着いたころに、彼のことでひろがったうさや話題をここにあげることは、すべてに正確であろうとするにすぎないとはいえず、まんざら無用ではないだろう。真実にせよ、うそにせよ、他人について言われていることは、その人の生涯に、またとりわけその人の運命に、しばしば実際のおこないとおなじほど多くの場所をしめているものだ。ミリエル氏はエクス的高等法院の評議員の息子であった。高貴な法官の家柄である。彼について語られたところによると、その父は、自分の職のあとつぎにするつもりで、高等法院の家柄にかなりひろくおこなわれていた習慣にしたがって、彼を非常に早く、十八歳か二十歳のときに、結婚させてしまったのであった。シャルル・ミリエルは、そうした結婚にもかわらず、多くのうわさの種をまいたということだった。彼は風采がrippaだった、どちらかといえば小柄なのだが、粹で、品がよくて、才気があった。はじめのころの生活は社交と情事とに明けくれた。そこへ大革命がやってきた。事件がやつぎばやに起こった。高等法院の家柄の人たちは、殺され、追

いたてられ、追いつめられ、四散した。シャルル・ミリエル氏は、大革命のはじめのころから、イタリアに亡命した。彼の妻は、以前からかかっていた胸の病氣のために、そこで死んだ。夫婦には子供がなかった。ついでミリエル氏の運命には何が起こったか？ フランス旧社会の崩壊、彼自身の一家の没落、九三年（一七九三年）の悲劇的な光景、

——高まる恐怖のために遠方からながめる亡命者たちにとって、おそらくいっそうおそろしかったであろう光景、そうしたものが、彼の内心に、俗世をすてて孤独にのがれるという考えを芽ばえさせたのであるうか？ 世の中の大変動に生活と財産とをうばわれながらびくともしない人でも時として一種の神秘なおそろしい打撃に心を動転させられることがあるが、彼の場合も、それまでの生活をしめていた気晴らしや情事のただなかで、突然そうした打撃におそわれたのであろうか？ だれもそれを言うことはできなかったであろう。知られていたことといえば、彼がイタリアからかえってきたとき、司祭になっていたということだけである。

一八〇四年に、ミリエル氏はB（プリニョル）の主任司祭だった。すでに年とっていて、奥深い隠遁のなかに生活していた。

戴冠式のころ（ナポレオン皇帝の戴冠式、一八〇四年十二月）なんであった、かもうよくはわからないが、主任司祭の職務上のちよっとした要件で、彼はバリに出かけた。いろんな有力者のなかでも、彼はフェーシュ枢機卿殿（ナポレオンの大司教、ヴァチカン駐在フランス大使、ピウス七世について戴冠式に列した）のところへ、教区民のために請願に行った。皇帝が叔父の枢機卿を訪問にきていた日のことだが、ひかえ室に待っていたこの風格のある主任司祭は、ちょうど陛下の通るところに行きあった。ナポレオンはこの老人に何か特別な関心で注目されているのを知って、ふりかえり、突然こう言った、

——「そこで余に注目しているじいさんは何者か？」

——「陛下」とミリエル氏が言った、「あなたはじいさんに目をとめられ、わたくしは偉人に目をとめました。どちらにも御利益ごりやくがありましう」

皇帝はその晩すぐ枢機卿にこの主任司祭の名をきき、それからまもなくミリエル氏は自分がディーニュの司教に任ぜられたのを知ってひどくおどろいた。

いったい、ミリエル氏のはじめのころの生活について言われている話では、何がほんとうなのか？ だれも知らなかった。大革命以前のミリエル家を知っていた家族はほとんどなかったのである。

ミリエル氏は小さい町に新しくきた人のすべてがこうむる運命にしたがわなければならなかった。そういう町では、口のうるさい連中は多いが、頭で考える人間はほとんどいないのである。彼は司教であったが、いや司教であったからこそ、そうした運命にしたがわなければならなかった。だが、要するに、彼の名をめぐる話題は、おそらく単なる話題にすぎなかったであろう。うわさであり、むだ口であり、軽口というものであろう。軽口というよりもむしろ、南の地方のどぎつい言葉でいうところの「長談義」であろう。

それはともかくとして、ディーニュに司教職でとどまって九年たつたいまでは、最初小さい町で身分の低い人たちのあいだの会話の種となるそうしたうわさのすべては、深い忘却のなかに没しきつた。だれひとりそれを話そうとしなければ、だれひとりそれを思いだそうとしなかったらう。

ミリエル氏がディーニュにやってきたとき、ひとりの老嬢をつれていた。バチスチヌ嬢といって、彼の妹で、彼よりも十歳年下だった。

ふたりには召使としてバチスチヌ嬢と同年の女中がひとりいるきりだったが、それはマグローール夫人と呼ばれ、「主任司教殿の女中」の身分から、いまでは老嬢の小間使と司教閣下の家政婦とをかねた二重の肩書きをもっていた。

バチスチヌ嬢は長身で、顔色の青い、やせた、おとなしい人間だった。彼女は「尊敬すべき」という言葉のあらわす理想を地で行ったような女だった。というのは、女性が尊敬される上に慕われるために

は母親でなくてはならないように思われるからだ。彼女は美しかったことは一度もなかった。これまで教会の仕事の連続でしかなかったその生涯は、いつのまにか彼女の身に一種の白さと輝きとをそえるようになってしまった。年をとるにつれて、善意の美しさともいうものをおびるようになった。若いときのやせたからだの感じは、成熟すると、透明体のようになった。そうした透きとおったからだから天使が見えた。それはひとりの処女であるというよりも、それ以上に一つの魂であった。彼女の身柄は影でできているようだった。その肉体はそこに性があるだけの余裕がほとんどなかった。何か、ある光をふくんだわずかな物質、いつもふせている大きな目、魂が地上にとどまっているためのよりどころなのだった。

マグローール夫人は背が低くて、色の白い、脂肪ぶとりの、いそがしそうなおばあさんで、一つにはよくはたらくために、つぎには喘息のために、いつも息ぎれがしていた。

その到着の日、ミリエル氏は、司教を旅団長のすぐつぎに位させる勅令によって定められた名譽の待遇を受けて、司教館におさまった。市長と市会議長とがまっさきに彼を訪問し、彼のほうは、將軍と知事とをまっさきに訪問した。

着任がおわると、市は司教が仕事にかかるのを待った。

## 二 ミリエル氏ビヤンヴニュ閣下となる

ディーニュの司教館は公立慈善病院に隣つていた。

司教館はひろい美しい石造りのやかたで、前の世紀<sup>(十八)</sup>のはじめにアンリ・ビュジュ閣下によって建てられた。これはバリ大学の神学博士で、シモールの大修道院長であり、一七二二年にディーニュの司教となった人である。このやかたはいかにも教区の長にふさわしい住居であった。すべてに堂々たる風格があった、——司教の部屋、客間、居間、フィレンツェの古い様式にならった、アーケードつきの歩

廊のある、すばらしくひろい中庭、大きい木々の植わった前庭。一階にあつて前庭を見わたすこの長いみごとな回廊状の食堂で、一七一九年七月二十九日に、アンリ・ビュジェ閣下から正餐の招待を受けたのは、アンブロンの大公大司教シャルル・ブリュール・ド・ジャンリス閣下、カプチン会士でグラーズの司教のアントワヌ・ド・メグリーニ閣下、フランス修道院総会長でサン・トノレ・ド・レランの大修道院長フィリップ・ド・ヴァンドーム閣下、ヴァンスの男爵司教フランソワ・ド・ベルトン・ド・グリュオン閣下、グランデーヴの領主司教セザール・ド・サフラン・ド・フォルカルキエ閣下、そしてスネーズの領主司教でオラトリオ会の司祭であり国王づきの説教師であるジャン・ソアナン閣下であつた。これら主客七人の高位聖職者たちの肖像はこの広間をかざり、この記念の日づけ「一七一九年七月二十九日」は、白大理石の板に金文字でほりこまれていた。

慈善病院は、小さい庭のある、二階建ての、せまくて低い建物だつた。

到着して三日後に、司教は病院を見舞つた。見舞いがすむと、彼は院長に自分の家まできていただきたいとねがつた。

「院長さん」と彼が言つた、「いま病人は何人いるのですか？」

「二十六人おります、閣下」

「わたしが数えたのもそうです」と司教が言つた。

「どうもベッドが」と院長が語をついだ、「つまりすぎており

まして」

「わたしもそれに気がつきました」

「病室が小部屋ばかりでして、通風がわるいのです」

「わたしにもそんな気がします」

「それに、日のさすときも、庭は回復者たちにせまくて」

「わたしもそう思いました」

「流行病でもおきますと——ことしもチフスがありましたし、二年前には軍隊熱(多汗性)がはやりましたが——時には百人にもなり

ます、どうしていいかわかりません」

「わたしもさつきふとそう考えました」

「しかたがございませんよ、閣下」と院長が言つた、「あきらめなくては」

この会話は司教館の一階の回廊食堂でかわされていた。司教はしばらく沈黙をまもつたが、やがて急に病院長のほうをふりむいた。

「あなた」と彼が言つた、「この広間だけでどれだけベッドが置けるとお考えですか？」

「閣下の食堂にですか？」と院長はあつげにとられてさげんだ。

司教は広間を見わたして、目で測定し、計算しているように見えた。

「二十ははいる、ベッドが」と彼は、まるでひとりごとのように言つて、それから声をあげながら、「ねえ、院長さん、ちょっと申しあげますがね。あきらかにまちがつたことがあります。あなたのところは、五つか六つの小部屋に二十六人もおられる。わたしどものほうは三人ですが、六十人分はある。これはまちがつたことですよ。あなたがたはわたしの家に住み、わたしはあなたがたの家に住みます。わたしの住む家をあげわたしてください。ここはあなたの家です」

そのあくる日、二十六人の貧しい人々が司教館に引越し、司教は病院に移つた。

ミリエル氏は、一家が大革命で破産したので、少しも財産はなかつた。彼の妹は五百フランの終身年金をもらっているが、司教館にいて、それだけあれば彼女ひとりの費用には十分だつた。ミリエル氏は司教とやって國家から一万五千フランの手当を受けていた。慈善病院へ住みにやってきたその日に、ミリエル氏は、この金額の使途を断固としてつぎのようにきめた。われわれは彼の手で書かれた覚え書きをここに写すことにしよう。

「わが家の支出をきめるための覚え書き」

|                                       |             |
|---------------------------------------|-------------|
| 小神学校のために                              | 一五〇〇リーヴル(フ) |
| ラザリスト修道会                              | 一〇〇リーヴル     |
| モンディディエのラザリスト修道会士たちのために               | 一〇〇リーヴル     |
| パリ外国宣教会神学校                            | 二〇〇リーヴル     |
| 聖霊修道会                                 | 一五〇リーヴル     |
| 聖地の宗教施設                               | 一〇〇リーヴル     |
| 聖母慈善協会                                | 三〇〇リーヴル     |
| なおまたアルルの同協会のために                       | 五〇〇リーヴル     |
| 監獄改善事業                                | 四〇〇リーヴル     |
| 囚人慰問救済事業                              | 五〇〇リーヴル     |
| 負債のために入獄している一家の父親の解放のために              | 一〇〇〇リーヴル    |
| 司教区の貧しい小学校教師の手当補助                     | 二〇〇〇リーヴル    |
| オート・ザルプ地方の穀物貯蔵庫                       | 一〇〇リーヴル     |
| 無料貧民女子教育のための、ディーニ、マノスク、シストロン各地区の婦人修道会 | 一五〇〇リーヴル    |
| 貧しい人々のために                             | 六〇〇〇リーヴル    |
| 私の個人出費                                | 一〇〇〇リーヴル    |
| 計                                     | 一五〇〇〇リーヴル   |

ディーニの司教職をつとめたあいだ、ミリエル氏は以上のとりきめをほとんど何一つ変更しなかった。彼はそれをこのまま「わが家の支出のきまり」と呼ぶことにした。

このとりきめはバチスチヌ嬢も絶対服従で承知した。この聖なる処女にとって、ディーニ殿(ディーニの司教殿)は彼女の兄であると同時に彼

女の司教であつたし、自然のままにしたがえば彼女の親しい友であり、カトリック教会にしたがえば彼女の長にあたる。彼女はただ單純に彼を愛し彼をあがめていた。彼が何か言うのだまてうなずき、彼が何かやるとそれに力をあわせる。ただ女中のマグローワール夫人だけは少しづつづつ言つた。さきほどの覚え書きにもあつたように、司教殿は彼のために千リーヴルしか取っておかなかつたので、バチスチヌ嬢の年金とあわせて、年に千五百フランにかならない。この千五百フランで、ふたりの老婦人などの老人が生活していたのである。

それでいて村の主任司祭などがディーニにくるときは、マグローワール夫人のきびしい節約とバチスチヌ嬢の頭のいい切りまわしのおかげで、司教殿はけつこうこれをもてなすことができるのだつた。ある日——ディーニにきて三月ほどたつてからだつたが——司教が言つた、

——「これだけじゃ、わたしも苦しい！」

——「そうでございますよ！」とマグローワール夫人がさげんだ、「閣下は、町の馬車代と教区の巡回費とのために県が当然出さなくちゃならない年金をさえ御請求にはならないんですよからね。代代の司教さまはみんなそうなさつておりました」

——「ほう！」と司教は言つた、「なるほどそうですね、マグローワールさん」

彼はその要求を出した。

しばらくして、県会はこの申し出を協議し、つぎのような名目で、彼に年額三千フラン支給することを可決した、——「四輪馬車代、馬車代、並びに管区巡回費として司教殿に給与」

ところがこの地方都市のブルジョワから非常な文句が出た、そして、この機会とばかりに、現に帝国の上院議員で、霧月十八日事件(一七九九年十一月九日ナポレオンがエジプトから戻つて執政政府をたおした)を有利にみちびいた五百人会の元メンバーのひとりであり、ディーニ市の近くに上院議員に下付されるすばらしい終身財産をもっていたある人のときは、宗教大臣ビゴ

ー・ド・プレミアムヌー氏にあてて、こつそりと憤慨の手紙をしたためた。つぎにその正しい原文を数行引用しよう。

「——四輪馬車の費用？ 人口四千にみたない小都市において、なぜそういうことをするので？ 駅馬車並びに巡回の費用？ まずその巡回の必要がどこにあるのです？ つぎに山間の土地にどうやって駅馬車を走らせるのです？ 道路はありません。馬にのってしか行けません。シャトー・アルヌーにあるデュランス川の橋さえほとんど牛馬をささえることはできません。司祭などというものはすべてその調子です。食欲であり強欲であります。このたびの司祭も着任の当初はおとなしい使徒のようにふるまいました。いまではほかと変わりはありません。四輪馬車が必要だの駅馬車が必要だのと言います。代々の司教とおなじくせいたくが必要なのです。いやじつに！ 司祭というやつはどいつもこいつも！ 伯爵殿、皇帝がこれらのなまぐさどもからわれわれを解放せられるときがくるまでは、おさまりはつきまませんぞ。法王打倒！（当時ローマ（ヴァチカン）とのあいだにいろんな問題がもつれていた）小生はカエサル（オクトー）ひとりのためにあるのみです。云々」

それとは反対に、こんどのは、マグローール夫人をたいそうよろこばせた。——「けっこうなことです」と彼女はバチスチーヌ嬢に言った、「閣下はまず他人のことからおはじけになりました、けれどもやはりおしまいはご自分のことをなさらなければならなかったのです。慈善のことはもうすっかりおきめになっております。ですから、三千リーヴルはわたくしたちのものです。やっとなで！」

その晩、司教はつぎのような文句の覚え書きをしたためて妹にわたした。

「馬車と巡回との費用」

慈善病院の患者たちに肉汁を与えるために……………一五〇〇リーヴル

エクスの聖母慈善協会のために……………二五〇リーヴル

ドラギニャンの聖母慈善協会のために……………二五〇リーヴル

すて子のために……………五〇〇リーヴル

孤児のために……………五〇〇リーヴル

計……………三〇〇〇リーヴル

ミリエル氏の予算表はそんなふうだった。

司教区の聖式謝礼、たとえば婚姻公示の取り消し免除や、婚姻公示の免除、略式洗礼、説教、教会堂や礼拝堂の祝別式、結婚式等々の収入については、司教はそれを貧乏人にめぐんでやるだけに、金持ちからはそれだけきびしく取りたてた。

しばらくたつと、献金が流れこんできた。もっているものもたないものも、ミリエル氏の戸口をたたたく。前者が寄託して行ったほどこしものを、さっそく後者が求めにくるのである。司教は一年とたたないうちに、あらゆる慈善救済の会計係となり、あらゆる貧窮の出納係となった。巨額の金銭が彼の手を通ることになった。だがその生活法に何の変化をきたすこともなく、余計なものは何一つ彼の必要に加えられなかった。

それどころではない。常に上の人間の同胞愛よりは下の人間の貧困のほうが多いのであるから、すべては、いわば、受けられる前に与えられてしまふのだった。焼け石に水のようなものだった。お金はいくら受けてとっても、いつもすっからかんだった。すると彼は着ているものもぬいだ。

習慣によって司教というものはすべてその訓辞や管区への教書のはじめに自分の洗礼名をしるすことになっていたので、この地方の貧しい人々は愛情のこもった一種の本能で、司教の数ある姓と名のなかから彼らにとって意味のあるものを選び、司教をビヤンヴニエ閣下（閣下）<sup>（よそ）</sup>としか呼ばなかった。われわれも彼らにならうことにしよう。そして場合によってそのように呼ぼう。それにこの呼び名は本人の氣に

も入っていた。——「この名が好きですね」と彼は言うのだった。「ビヤンヴニユが閣下のしかつめらしさをとつてくれる」  
われわれはここに描く肖像が何も真実のままであるとは主張しない、ただ似ていると言うだけにしておこう。

### 三 よい司教につらい司教区

司教殿はその馬車代をほどこしものにかえてしまったからといって、巡回をやらなかったわけではない。ディーニユの司教区はやっかいな土地だった。さきほども言ったように、平野はきわめてすくなく、山が多く、道らしいものはほとんどなかった。三十二の主任司教館と四十一の助任司教館と二百八十五の支教会とがあった。それらを全部見まわるとは大変な仕事だ。司教殿はそれをやりとげた。近いところは歩いて行く、平野は、三輪馬車で、山は、ろばの鞍につけた腰かけで。ふたりの老婦人がおともをする。道のりがふたりに困難にすぎるときは、彼がひとりで行く。

ある日彼は、ろばにのつてスネーズにやってきた。これはもと司教所在の町である。そのとき、彼の財布は非常にとほしく、ほかの乗り物で行くことができなかったのであった。町長が司教館の入り口に出迎え、彼がろばからおりののをいかにもひんしゅくに堪えないような目でながめる。数名のブルジョワたちがそんな町長のまわりで笑っている。——「町長殿」と司教が言った、「また町のみなさん、あなたがたのひんしゅくを買うことはよくわかっています。イエズス・キリストのおのりになったろばにまたがることは、あわれな司教にとつてはなほだ傲慢だと思われるでしょう。わたしはしかし、やむをえずそうしたのです、決してからいばりからではないのです」

巡回中は彼は寛大でありおだやかであつて、説教するというよりも、むしろ膝をまじえてしゃべるといふふうだった。彼はどんな徳を説くにしても、了解できないような秤の上に決してそれをのせなかつ

た。理論や手本にしても、決してかけはなれたところにそれを求めなかった。ある地方の人々にはその近辺の例をひっぱってくる。こまつている人たちに苛酷である村々では、こう言う、——「プリヤンソンの人たちをごらんさない。あそこでは貧しい人たちが未亡人や孤児には、みんなより三日前に牧場の草を刈つてもいいゆるしが出ています。そうした人たちの家がこわれるときはただで建てなおしてやっています。ですから、あれは神に祝福された土地なのです。一世紀百年ものあいだ、あそこにはひとりの人殺しもありません」

利益や収穫にがつがつしている村々では、彼はこう言う、——「アンプロンの人たちをごらんさない。もしも一家の父親が、とりいれのときに、その息子たちを兵隊にとられていたり、その娘たちを町に奉公に出していたりするとき、また父親が病気でたたらけないような場合は、主任司教は日曜日のミサのあとの説教でそのことをみんなにつたえます。するとそのあと、村の男女子供が、その気の毒な人の畑へ行つてとりいれをしてやり、わらや穀物をその納屋にはこんでやるのです」——金銭や遺産の問題で不和になった家族たちには、こう言う、——「ドヴォルニーの山間の人たちをごらんさない。あそこは五十年のあいだに一度も夜うぐいすの歌がきかれないという荒れはてた土地です。ところが一家でその父親が死にますと、息子たちはよせへかせぎに出かけ、娘たちが夫を見つかることのできるように財産を残してやるのです」——訴訟を好み、小作人が書類にはる印紙のために破産してしまうような村々では、こう言う、——「ケーラの谷間のあの善良な農夫たちをごらんさない。あそこには三千人の人が住んでいます。いやまったく！ 一つの小さい共和国ですよ。そこにはひとりの裁判官もひとりの執達吏もおられません。村長がいっさいをやるのです。彼が税の割り当てをやり、正直に各人に税を課し、無料であらそいをさばき、報酬をもらわずに財産を分配し、費用をとらずに判決をくだすのです。そしてみんなは彼に服従しています。それというのも彼は素朴な人たちのなかにあつてまたじつに正しい人間だからです」

——小学校の教師のいない村々では、彼はまたケーラの人たちをひきあいに出した。「あそこの人たちがどんなふうにいるのかごぞんじですか？」と彼は言う、「十二軒や十五軒くらいの小さい部落ではひとりの先生をいつもやといきりにはできませんから、その谷間の地方全体で何人かの教師をもっているとして、先生がたは村をまわり、こちらに一週間、あちらに十日というふうにして教えています。そうした先生がたは緑日の市などに出かけます、わたしはそこで見かけたことがあります。彼らは帽子のかざりひもに羽ペンをさしているの、それとわかります。読み方だけを教えている人は一本さしているの、読本と算数とを教えている人は二本、読本と算数とラテン語とを教えている人は三本です。三本の人というのは大学者というわけですね。しかし無学だというのはなんといいましょう！ケーラの人たちのようになさい」

彼はそんなふうに、まじめに、父親のように、話すのだが、実例がないと比喩を考えたし、文句をすくなく映像を多くしながら、ずばりと要点をつくのであって、これは確信と説得力とをもっていたイエズス・キリストの雄弁とおなじものであった。

#### 四 言葉にふさわしい行為

彼の会話は親身で陽気だった。彼のかたわらで生涯をすごしているふたりの老婦人にもよくわかるように言っている。笑うときはまるで小学生の笑いだった。

「マグロワール夫人は好んで彼を「殿下」と呼んだ。ある日、彼はその脇掛け椅子から立ちあがって本をさがしに書庫へ行った。その本は高い書棚にあった。司教は背がかなり低かったの、とどかなかった。——「「マグロワールさん」と彼が言った、「椅子をもってきてください。いくら殿下でもあの棚まではとどかない」(殿下には原語で背のさあ)」

彼の遠縁にあたるロー伯爵夫人は、彼の前で何かといえば彼女の三人の息子のいわずゆる「希望」なるものを数えたる機会をのがすまいとした。彼女には非常に年とって死ぬのが目に見えている親族が多く、息子たちが自然そのあとをつぐことになる。三人のうち一番下は、ある大叔母からたつぷり十万里ーヴルの年金をもらうことになつてゐるし、中の息子はその叔父の公爵の称号をうけつぐし、長男はその祖父の貴族の称号(爵)をつぐことになる。司教はふだんはだまって、そうした罪のない、ゆるされるべき母親の自慢話をきいていた。しかしあるとき、ロー夫人がまたまたそのあとつぎや「希望」のことをきどくどくりかえしていったとき、彼はいつもよりほんやりとしてほかのことを考えているように見えた。彼女はじれったそうにして話を中断した。——「あら、お従兄さま！何を考えこんでいらつしやるの？」——「ちょっと妙なことをね」と司教は言つた、「たしか聖アウグスチヌスのなかにあつたと思うが、こういう文句です、——《あとをつぐ者を残さぬ人に希望をかけよ》」

またあるとき、彼はその地方のある貴族の死亡通知の手紙を受けと

つたが、そのなかに、故人の爵位はおろか全部の親戚の封建的貴族的資格が残らずらりと長い用紙にならべてあつた。——「死はなんという丈夫な肩をもっているのだらう！」と彼はさげんだ、「なんというりっぱな肩書きの重荷を背負つて勇みたつてゐるのだらう、このように墓をも虚栄の材料につかうとは、人間はなんとという才知にたけているのだらう！」

彼は時としてやさしくからかうことがあつたが、それはほとんどいつもまじめな意味をふくんでゐた。四旬節のあいだに、ある若い助任司祭がディーニユにきて大聖堂で説教した。彼はかなり雄弁だった。彼の説教の題目は慈善だった。彼はできるだけおそろしく地獄のさまを描き、また天国を望ましく美しいものにつくりあげ、そんな地獄をさけて天国にたどりつくために、貧困の人々に物をほどこせと金持ちにすすめた。聴衆のなかに、ジェボラン氏と呼ばれて、隠退してはい